



頑張る経営者の
応援サイト

#800007

経営者に知ってほしいがんの知識
/ 第7回 若くして発症する家族性腫瘍

がんまつわる迷信はたくさんありますが、「遺伝病」という誤解もその一つで、がんの原因のうち遺伝が占める割合は5%程度にすぎません。

両親ともがんだときけば「がん家系」という気がしますが、男性は3人に2人、女性も2人に1人が生涯にがんにかかりますから、決して珍しいケースではないのです。

がんは遺伝子が傷ついてできる病気ですが、基本的には遺伝する病気ではありません。ただし、5%にすぎませんが、遺伝性のがんも存在し、「家族性腫瘍」と呼ばれます。

ハリウッド女優の“アンジー”こと、アンジェリーナ・ジョリーさん(42歳)もこの家族性腫瘍の遺伝子を持つ一人です。彼女は2013年、健康な乳腺組織を、2015年には正常な卵巣を「予防的」に摘出して、大きな話題となりました。

彼女は、乳がんや卵巣がんを発症したわけではありません。遺伝子検査の結果、BRCA1と呼ばれる「がん抑制遺伝子」(がんの発症を防ぐ遺伝子)に生まれつき異常があることが分かり、「87%の確率で乳がん、50%の確率で卵巣がんになる」と医師に宣告されたため、乳腺や卵巣を「予防的に」摘出したのです。

すべての遺伝子は父母から1つずつ受け取りますが、アンジーの場合、母親からのBRCA1に異常を持っていました。

異常なBRCA1遺伝子を持った卵子と正常な精子が合体した受精卵から彼女のすべての細胞は作られましたから、血液を採るだけで、BRCA1の異常が分かったのです。

がん抑制遺伝子は、細胞のがん化を防ぐ働きを担っていますから、父母からのどちらか一方が生まれつき機能しないと(両方とも異常だと出生できません)、残るもう一方の遺伝子に傷がつくだけでがんが発症しやすくなります。

これは、坂道を下る自転車の前輪のブレーキが最初から壊れているようなものです。後輪のブレーキが効いているうちは一見何の問題もないように見えますが、もし、後輪のブレーキも壊れれば大怪我につながります。両方のブレーキが壊れるまでには時間がかかりますが、アンジーのようにどちらかがもともと壊れているケースでは発症までの時間が短くなります。家族性腫瘍が若い頃から発症することが多いのはこのためです。

たった5%とは言え、血縁者に若くしてがんを発症した方が多い場合には注意が必要と言えるでしょう。

以上

上記内容は、本文中に特別なことわりがない限り、2017年7月14日時点のものであり、将来変更される可能性があります。

執筆者: 東京大学医学部附属病院 中川 恵一(なかがわ けいいち) 医師
1985年東京大学医学部医学科卒業後、東京大学医学部放射線医学教室入局。スイス Paul Sherrer Institute へ客員研究員として留学後、社会保険中央総合病院放射線科、東京大学医学部放射線医学教室助手、専任講師を経て、現在、東京大学医学部放射線医学教室准教授。この間、平成15年から26年まで、東京大学医学部附属病院緩和ケア診療部長を兼任。患者/一般向けの啓蒙活動にも力を入れており、福島第一原発後は、飯舘村など福島支援も積極的に行っている。主な著者には『自分を生ききる』(共著)、『緩和医療のすすめ』、『ビジュアル版 がんの教科書』、『がん!放射線治療のススメ』など多数。日経新聞で「がん社会を診る」を毎週連載中。がんの専門家として、人気TV番組「世界一受けたい授業」にも出演。

本レポートは、大同生命保険株式会社が提携する株式会社日本情報マートが作成または原資料の提供者の許可を得て提供するものであり、掲載情報の著作権は株式会社日本情報マートまたは原資料の提供者に帰属します。著作権者に無断で複写、複製することは禁じられています。

本レポートは、情報提供のみを目的とするものであり、本レポートにおいて提供されるいかなる情報も、本レポート利用者の皆様に対し、取引の申し込みや勧誘、あっせん、推奨、助言、金融商品を含む商品やサービスの販売等を目的として提供されるものではありません。

本レポートに記載された情報を利用または参考として行われた経営上の判断や行為・結果等について、大同生命保険株式会社及び株式会社日本情報マート並びに原資料の提供者は一切責任を負いません。

本レポート中の表記の方法等については原則として統一しておりますが、原資料の提供者、取材協力者等の意向によって他と異なる表記をしている力所があります。

本レポートの全部または一部を予告なしに変更することがありますので、予めご了承ください。
